

## ボランテティアと私

何かを求めて

## ◆国際ボランテティア◆ 法学部2年 渡辺千尋さん

インド西ベンガル州の州都・コルカタにあるマザー・ハウス。1979年にノーベル賞を受賞したマザー・テレサが活動の拠点とした場所だ。19歳のときにインドに渡ったマザー・テレサは、ここで恵まれないインドの人々のために献身的に活動した。ハウスには、今も世界中からマザーを慕



笑顔で夢を語る渡辺千尋さん

うボランテティアが集まる。

マザー・ハウスは「死を待つ人の家」などコルカタにある5つのチャリティー施設の総称だ。施設では孤児や障害者などが寄付を受けて生活している。これらの施設では常時ボランテティアを受け入れており、日本からおとずれる学生も多く、渡辺千尋さんはそのひとりだ。

インド「マザー・ハウス」で3週間  
障害のある子供達と笑顔で向き合う

渡辺さんは昨夏、単身インドに渡り、ホームステイをしながら3週間ボランテティアに従事した。様々な国の人に混じって「ダヤダン」という施設で働いた。

「施設には2歳から15歳までの子供たちが共同で生活しています。抱えている障害も脳性まひやダウン症など様々。私はマーシー（賃金をもらって施設で働いているインド人従事者）に教えてもらいながら、歯を磨いてあげたり、体を拭い

てあげたり、服を洗ったり。いつも子供たちと一緒に居ました。子供たちの透き通った笑顔から元氣をもらいました。だから、仕事もきつくは感じませんでした」

日本では特に、介護ボランテティアの経験はなかった。「マーシーの子供たちへの接し方って、凄く荒っぽく見えるんです。木でできている車椅子に無理やり座らせているので、子供たちの体には床ずれの痕がいくつもあつたりして」と、はじめてのボランテティアで戸惑いもあつた。

「だからって私たちがすべてをしてあげるわけにはいかないんです。外国人である私が、自分の価値観を押しつけてはいけません。現地の人が、現地の人たちの感覚で、変えていかないといけないことなんです。

子供たちだつてボランテティアに甘やかされてばかりでは、いっこうに成長しない。だから私は常に笑顔で子供たちに接するように心がけていた一方で、ちゃんと怒るときは怒るようにしていました。本当の意味でのボランテティアって、難しいと感じました」

ストレス感じずに充実した生活  
食中りには「用心が肝心」

インドではホームステイをしたが、「言葉の壁にはじめは戸惑いました」という。「日常会話程度の英語はしゃべられるようにしていったのです。が、現地のベンガル語や英語が飛び交う環境に、

おいてきぼりの感覚に陥りました」。孤独感もつ  
のつただろうが、「ただそれも3日目には慣れま  
した」というから力強い。

「インド料理も凄くおいしかったですし、充実  
した生活を過ごせました。ひどく汚れたコルカタ  
の空気や日本人とみるとすぐに近寄ってくる物乞  
いの人たちに、大きなストレスを感じてしまう人  
も周りにはいたのですが、私は事前にそういう人  
様子も調べて見知っていたので、まったく平気で  
した」

明るく気丈な渡辺さんは、嬉々としてインドで



インドのマザーハウス「ダヤダン」で

の生活を語るが、ちよつとした「事件」もあった。  
一度、食べ物にあたってしまったのだ。「腹痛で、  
周りが見えないほど頭が真っ白になってしまつて、  
そのときは焦りました」と当時を思い起こす。「幸  
い現地のコーディネーターの方がお医者さんを連  
れてきてくれて、お粥を食べさせてもらつたりし  
ました」というが、「用心は肝心です」という教  
訓を得た。

### 「自分を変えたかった」から 『やる気応援奨学金』を活用

渡辺さんがインドにボランティアに行こうと思  
い立つたのには、「インドに行つて、自分の思い  
を変えたい」というわけがあった。

「大学入学時に、私はこれまでずっと抱き続け  
ていた夢をあきらめました。私、バレリーナにな  
りたかつたんです。でも、高校生のときに現実の  
壁にぶつかつて……。それで自分を見つめ直して視  
野を広げたい、新しい価値観を得たいと思つてい  
たんです。そんなとき、インドに行つて価値観が  
180度変わったという話を友人から聞いて、『こ  
れだ!』と思いました」

それからは、インド・コルカタのマザー・ハウ  
スでボランティアを受け入れていることを知り、  
法学部の『やる気応援奨学金』を利用してインド  
への旅を実現させたという。

『やる気応援奨学金』は選抜があり、すべて  
自分で計画しなければならないので不安はありま

したが、チャレンジしてみるものだと思います。  
この制度がなければ、インドに行くことができな  
かつたですから。何よりモチベーションが高かつ  
たことが選ばれた理由だと、後で聞きました」

『やる気応援奨学金』では、プランを実現した  
後に報告書を書くことになっており、多摩キャン  
パス6号館2階のリソースセンターで渡辺さんの  
報告書も見ることができている。

### ボランティアで価値観変わる 「人を笑顔にする仕事がしたい」

「人を笑顔にする仕事に就きたいと、そうはっ  
きり思いました」。ズバリ、インドでのボランティ  
アを通して、価値観は変わったかという質問をし  
て返ってきた答えがこれだった。

「ダヤダンの子供たちの笑顔は本当に透き通つ  
ていたんです。比べるわけではないのですが、ど  
こか今の日本の子供たちの目に冷たさを感じるこ  
とがあるんです。

インドは宗教が篤く信仰されている国というこ  
ともあつて、インドの人たちは信じるという心  
持っています。これも日本にないところだと感じ  
ました。だから、私は人に喜んでもらう仕事、人  
から信頼される仕事に就きたい。遠い将来には、  
笑顔の写真に囲まれて、自然に平和が語れるカ  
フェをオープンするのが夢です」

こう夢を語る渡辺さんの笑顔は透き通っていた。

(学生記者 恒川賢史 法学部3年)